築山を見学する矢指小児童

第1章　減災

震災を教訓に津波対策施設を整備

東日本大震災による津波や液状化で、甚大な被害に遭った旭市。震災での教訓を基に、災害に強いまちを目指し沿岸部で津波対策施設の整備が進められています。

津波対策施設の役割

市内の津波対策施設が整いつつあります。施設の役割や整備されている場所、使用方法などを確認して、いざというときに備えておきましょう。津波対策施設は沿岸部に暮らす人だけが使用するものではありません。沿岸部を訪れた市民や観光客などが、高台まで避難できない場合に、緊急的に避難する施設でもあります。

かさ上げされた海岸堤防や、河川の河口部に設置が進められているフラップゲートは、津波を弱めたり、防いだりする効果があります。津波が内陸に入り込む時間を稼ぎ、避難者が少しでも遠くへ逃げるための役割も持っています。

津波避難道路は、津波浸水区域外に早く確実に避難するために整備される道路です。

避難所としても活用される学校施設

学校は地震から児童生徒を守り、地域の人たちが避難所としても利用する重要な施設です。校舎の耐震化だけでなく、体育館などの天井や照明が地震で落下しないよう対策が進められ、安心して避難できる施設になりました。

備えることの大切さ

東日本大震災の教訓から、市が策定する地域防災計画や避難計画が、より実践的な内容に見直されています。市が作成している防災マップや津波ハザードマップも見直しが続けられているので、常に最新の情報を家族や地域で共有しておきましょう。

小中学校では、旭市防災資料館を活用した防災教育などが進められているほか、沿岸部の学校では津波避難訓練として、高台に避難する訓練も行われ、子どもの頃から地震や津波、そのほかの災害に備える力を育てています。

市が作成する防災に関するマップ

整備が進む津波対策

東日本大震災の津波被害を教訓に、今まで整備されていなかった新たな施設が市内に整備されるようになりました。

海岸堤防　データ／市内延長11㎞　海抜６ｍ

以前の海岸堤防は、高潮などに備えて整備されていました。震災では、最大7.6ｍの津波が堤防を超えて押し寄せました。千葉県は、数十年から百数十年に一度程度で発生する津波を想定して、海岸堤防のかさ上げを行いました。

津波避難タワー　データ／高さ８～10ｍ　避難可能人数100人

遠くまで逃げることが難しい人や逃げ遅れてしまった人が、一時的に垂直避難できる津波避難タワーが、市内に４か所設置されています。階段のほかスロープも設置され、高齢者や障害がある人の避難にも配慮しています。

築山　データ／高さ７ｍ　避難可能人数500人

普段は都市公園として、地域の憩いの場として利用されている日の出山公園。園内には築山が整備され、頂上部にはおよそ500人が避難できます。防災倉庫が設置され、災害時に必要な物品も保管されています。

フラップゲート

震災時に津波が川を遡上し、河川などの周囲では浸水被害が多く見られました。津波の遡上を防ぐため、市内10か所の河川などの開口部ではフラップゲートの整備が進んでいます。

津波避難道路　データ／総延長4.3㎞

海岸地域から津波浸水区域外の内陸部に、確実に避難することを目的とした津波避難道路。市内で２路線の整備が進められています。被災時の救急救命活動や被災後の復旧作業でも、重要な役割を果たします。

身近な公園に築山があって安心

日の出山公園は家から近いので、よく遊びに来る場所です。日の出保育所や矢指小など、子どもたちが利用する施設の近くに、津波が発生したときに避難できる築山があると安心ですね。

小森希世恵さん
耀太（ようた）さん（東足洗）

海岸堤防を過信せず逃げるが一番

大森幸子さん
（平松）

津波を経験したため、震災後は砂浜に下りることはなくなってしまいました。海岸堤防は高くなったけど、津波が来るときは堤防があるから大丈夫と思わず、逃げることが一番だと思います。

日頃からの心構えが何よりも大切

旭市役所総務課
地域安全班
林一美　副主幹

市では避難施設の整備やハザードマップの見直しなど、さまざまな取り組みを行ってきました。しかしそれだけでは万全ではありません。命を守るために一番大切なことは、皆さんが主体的に行動することです。災害が起きたとき、一人一人がすぐに適切な行動を取れるかが重要で、その後押しをすることが行政の役割だと思っています。

あの日から10年の節目を迎えます。今一度、家族や近所の人と、災害が起きた時にどうするか、ハザードマップなどを活用して話し合ってもらいたいと思います。